社　会　科　学　習　指　導　案

指導者　　陣　場　峰　雄

１．日　時　　平成１８年７月７日（金）１校時
２．学　級　　１年４組　男子２１名　女子１５名　合計３６名
３．主　題　　第２章　古代国家の発展　　第３節「古代国家の発展」
４．主題について

この単元では、次の三つの内容を扱う。その一つは、東アジアとの関係、古墳の広まり、大和朝廷の成立にふれながら、古代国家が統一していくまでの流れであり、もう一つは、大陸の文物や制度を取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後天皇、貴族の政治が展開していくまでの流れである。その際、聖徳太子の政治と大化改新、律令国家の確立、律令国家の動揺、摂関政治については重点的にふれる。最後に、遣隋使や遣唐使のもたらした大陸の文化が日本の文化に大きな影響を及ぼしたこと、その後の遣唐使の廃止によって日本独自の国風文化が栄えたことである。この単元を学習させる意義として次のことがあげられる。第一には、わが国の古代の国家が成立するためには、日本独自の営みだけではなく、東アジアの国々との関係が色濃くあるという関係認識を深めさせることに適切な内容であることである。第二には、別個にとらえられがちな古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代を一つの連続とした時代の流れとしてとらえさせる、因果関係を見いだす力を高めることに適切な内容が多いことである。第三には、この単元で扱う古代の文化遺産が生まれる背景には、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせたり、他民族の文化、生活に関心をもたせ国際協調の精神を養うことに有用な内容が多く含まれていることである。これらの学習を通して歴史認識を深めることは、社会科の目標として掲げられている「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことにつながるものである。以上のことからこの単元は生徒の歴史的思考力や歴史に対する関心を高めるなど学習する意義が大きいものであると考える。

生徒は概ね歴史に興味・関心が高い。また、予習を学習プリントに従って行うことが定着してきており、中には自分なりの疑問を持って教科書の未習部分を読み進める生徒もいる。但し、生徒の多くは、歴史的事象個々の内容をおさえることはできても、事象間の因果関係を推測したり、共通性を見いだしたりするなど関連思考が不足している。点として歴史をとらえることはできても線としてつなげて考える力がまだ不足しているのである。それは、歴史的事象を一面で見たり、歴史学習は暗記するものと思いこませ、知識を断片的にしかとらえさせてこなかったからではないかと考える。

そこで、一つの歴史的事象は、それが先の事象の結果としてあり、また次の事象の原因となっているという視点を実際の事件を通して把握させる。また、単元の最後の時間に単元全体を貫く学習課題を設定し、既習事項をよりどころとして自分なりに考えた答えを発表させる方法をとりたいと考える。学習課題に対する答えは、自分なりの意見を構築させるという形をとるが、既習事項を関連づけさせるものであることに留意したい。その際、単なる感情論で終わらせることなく、妥当性のある根拠をもとに考え出されたものになるようにさせたい。そのような過程を経ながら事象の意味を段階的に深めてとらえさせたいと考える。

５．指導と評価の計画（別紙）

６．本時の達成目標

社会的事象への関心・意欲・態度	単元の内容を総括する学習課題を解決するために他の発表を傾聴し、自分としての考えを進んで記述したり、発表したりしている。
社会的な思考・判断	単元の内容を総括する学習課題に対するまとめを、既習事項と関連づけたり、事象間の因果関係を的確に捉えたりしながら記述している。
資料活用の技能表現	単元の内容を総括する学習課題に対するまとめをノート、資料集など複数の資料から的確な事項を選び、自分のことばで筋道をたてて記述したり発表することができる。
社会的事象についての知識・理解	飛鳥時代から平安時代末期までの主な流れを、重要な用語を使い時代の節目となる歴史的事象にふれながら記述したり発表したりすることができる。

７．本時の指導の構想

(1)　指導構想及び留意点

今回の授業は、第２章「原始・古代の日本と世界」第３節「古代国家の発展」の最後の時間であり、総括的な役割をもつところである。学習課題は、古代国家の確立、動揺、変質を因果関係でとらえさせ、一つの流れとしてまとめて話させるものである。その際、第３章の「中世の日本と世界」第１節「武装する豪族たち」の内容を課題を考える契機とさせるために補助的に扱う。また、生徒が資料や教科書の記述の写しに終わらぬよう、自分なりのことばでしかも、羅列的ではなく、物語のように流れを意識させながら自分の考えをまとめるようにさせたい。また、既習事項の想起のために、聖徳太子、天武天皇、聖武天皇、桓武天皇、藤原道長、後白河上皇など古代国家を特徴づける人物像、補助的に岩手県に縁のある源義経を提示して、その時代の世の中の様子に思いをはせながら授業を進めたい。さらに、因果関係を見いだす視点は、指導計画の中でくり返し伝え、机間巡視などをしながら助言していく。また、板書も生徒の思考を促すように、生徒の発表の要点を書いたり、構造的に表したいと考える。

(2)　かかわり合いを生かす手だて

律令制度に基づく中央集権国家の確立から律令制度の動揺、摂関政治、院政など古代国家の変質までの流れの中で、大きな出来事を絵画資料や年表資料でふり返り、武士という新しい身分にたよらなければならなくなった原因はどこまで遡ることができるか、について問いかけてみる（教師、教材とのかかわり合い）。生徒は、公地公民制度の成立、崩壊、貴族の出現、摂関政治、院政について学習している。「悲劇の人物として有名な源義経という武士が生まれるきっかけとなった原因は、実は古代に関係がある。」と話すと意外に思うだろう。そこで、武士が生まれるきっかけになったできごとはいつの時代のどんなできごとに遡ることができるのか考えることを課題にして考えさせたい。（学習課題の必然性）。生徒の発言を他の発言に結びつけたり、比べたりして段階的に問いかけをしていく（生徒相互のかかわり合い）。ここまでの指導過程が必然的に流れるよう進めていきたい。また、学習課題の考えとして自分がなぜそう思うのか、既習事項で関連すると思う複数の事象とその因果関係を再認させる。それを自分の考えの根拠の「よりどころ」として考えさせ、自分のなかで、想起された用語に脈絡をつけながら課題の答えとして伝える内容にまとめさせたい。この段階で「『ことば』を正しく豊富に使う」ことを強調した授業を進めていきたいと考えている。あまり関係があると気付いていなかった歴史的事象が実は一つの線でつながっている発見を感得させ、歴史のおもしろさに気付かせ、次の学習意欲につなげていきたいと考えている。

８．本時の展開

〈A〉達成度〈B〉学習速度〈C〉取り組み方（学習の仕方）〈D〉見方・考え方〈E〉興味・関心〈F〉生活経験

段階	過程	時間	学　習　活　動	評価の視点・方法	指導上の留意点	学習形態・教材・教具
導入	課題把握	10分	１．平清盛、源頼朝、源義経を紹介し、新しい身分である武士であることを確認する。 ２．武士は、飛鳥時代や奈良・平安時代に関係があることを聞く。 ３．学習課題をつかむ。 武士が生まれるきっかけはどこまでさかのぼることができるのか。今までの内容をふり返りながら探っていこう。		１． ・関心を高めるようＴＶで演じたキャストの写真を見せる。〈E〉 ・彼らを操った後白河上皇（朝廷）の存在にも気づかせる。 ２． ・生徒の、「意外だ」などの発言を取り上げる。 ・武士の初期の姿を絵画資料で見せ、武士が生まれる原因は過去にありそうだという意識をを引き出す。 ３．学習課題へつなげる。〈E〉	□一斉 ■写真ポスター ■絵画資料
展	課題追究 課題解決	33分	４．自分の考えをまとめる。 ５．まとめた結果を発表する。 ６．発表した複数の考えを分類する。 ７．分類された内容の是非を検討し、自分の考えを発表する。 ８．最終的な自分の考えをまとめる。 ９．課題の答えの模範例を聞く	４、５ 〈記述内容・発表内容〉 **学習課題に対する自分の考えを、既習事項と関連づけたり、事象間の因果関係を的確に捉えたりしながら記述している。** A：複数の事象、妥当性のある因果関係、関連、順序制 C：学習課題に対し、考察が進められるようによりどころとなる知識を与える、自分なりの答えをまとめさせる。 ８〈記述内容・発表内容〉 **奈良時代、平安時代の大きな節目を、重要な用語を適切に使い複数の事象にふれながら記述している。** A：複数の事象、正確性、妥当性のある因果関係、関連、順序性 C：律令制、墾田永年私財法、荘園など基本的な用語を教科書などで調べさせ、その用語を他の発表の時に確認させる。	４．年表資料をもとに、原因と結果の関係を考えながら、歴史を遡って見ていくことを助言する。〈C、F〉 ※机間巡視をして、書かれている内容の傾向をつかんでおく。 ※なぜそのできごとだと思うのか、原因と結果の連鎖に留意して考え、歴史上のできごとを具体的に必要なものにしぼって答えるように助言する。〈D〉 ６．共通していることばや考え方がないかどうかを見ていくよう助言する。 ８． ・周囲の意見から気づいた新しい見方や考え方にふれながら書くように補足する。（書いた紙は授業終了後提出させ、次時に紹介する旨を伝える。）〈A〉 ・他の発表を聞いて、初発の考えより、理由となることがらが多く、より確かだといえるように問い直させる。 ９．模範例とともに、他の学級の妥当性や脈絡のある理由でまとめられている例があれば紹介する。	□個別 ■ノート、教科書 ■年表資料 □一斉 □一斉 ■板書、ノート □一斉 ■年表資料 □個別 ■板書、ノート
終末	まとめ	7分	９．今回の学習課題に対して自分はどうだったのか自己評価しする。		・因果関係で掘り下げて考えるていくとそれ以前の歴史的事象まで一つの線につながることに気づかせる。 ・時間に余裕があれば、上記の視点にふれている生徒１，２名に発表させる。	□個別 ■ノート